

14日 火曜

I サムエル



13:1 サウルは、ある年齢で王となり、二年間だけイスラエルを治めた。

13:2 サウルは、自分のためにイスラエルから三千人を選んだ。二千人はサウルとともにミクマスとベテルの山地にいて、千人はヨナタンとともにベニヤミンのギブアにいた。残りの兵は、それぞれ自分の天幕に帰した。

13:3 ヨナタンは、ゲバにいたペリシテ人の守備隊長を打ち殺した。サウルのほうは国中に角笛を吹き鳴らした。ペリシテ人たちは、だれかが「ヘブル人に思い知らせてやろう」と言うのを聞いた。

13:4 全イスラエルは、「サウルがペリシテ人の守備隊長を打ち殺し、しかも、イスラエルがペリシテ人の恨みを買った」ということを聞いた。兵はギルガルでサウルのもとに呼び集められた。

13:5 ペリシテ人はイスラエル人と戦うために集まった。戦車三万、騎兵六千、それに海辺の砂のように数多くの兵たちであった。彼らは上って来て、ベテ・アベンの東、ミクマスに陣を敷いた。

13:6 イスラエルの人々は、自分たちが危険なのを見てとった。兵たちがひどく追いつめられていたからである。兵たちは洞穴や、奥まったところ、岩間、地下室、水溜めの中に隠れた。

13:7 あるヘブル人たちはヨルダン川を渡って、ガドの地、すなわちギルアデに行った。しかしサウルはなおギルガルにとどまり、兵たちはみな震えながら彼に従っていた。

13:8 サウルは、サムエルがいることになって例祭まで、七日間待ったが、サムエルは

ギルガルに来なかった。それで、兵たちはサウルから離れて散って行こうとした。

13:9 サウルは、「全焼のささげ物と交わりのおかげにえを私のところに持って来なさい」と言った。そして全焼のささげ物を献げた。

13:10 彼が全焼のささげ物を献げ終えたとき、なんと、サムエルが来た。サウルは迎えに出て、彼にあいさつした。

13:11 サムエルは言った。「あなたは、何とすることをしたのか。」サウルは答えた。「兵たちが私から離れて散って行こうとしていて、また、ペリシテ人がミクマスに集まっていたのに、あなたが毎年の例祭に来ていないのを見たからです。」

13:12 今、ペリシテ人がギルガルにいる私に向かって下って来ようとしているのに、まだ私は【主】に嘆願していませんと考え、あえて、全焼のささげ物を献げたのです。」

サウルは王となった頃は謙遜で寛容でありました。しかし多くの人がそうであるように、高い立場が与えられて周囲から認められるにつれて、謙遜を忘れ高慢になってしまいました。これはクリスチャンでも起こり得ることで、自己中心からきよめられていないことが明らかになるのです。サウルはその標本のようなものです。

サウルは高慢でありながら、信仰は弱く、ペリシテ軍やイスラエルの様子(6)を見て恐れてしまいました。そこで祭司しか許されていない、いけにえを献げるということをしてしまったのです。

彼はもっともらしい弁解をしますが、それも主のみこころと真理が分っていないことを暴露しています。それは単に戦いのための儀式ではありません。これから聖なる神に勝利していただくためなのですから、神様に従わなければ全く意味がありません。サウルは御心抜きで、ただ嘆願だけす

れば良いと思っていたようです。

どんなに人から誉められる立場でも、権限をもらって影響力があっても、主の前には赦された罪人にしか過ぎないのだということを、決して忘れないようにしましょう。そのように発言し、行動しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

